

# 井上翠と中国

山根幸夫

## はじめに

1941年春、私が東大文学部東洋史学科へ入った時から、中国語が東洋史学科の必修科目となった。中国語の講師は魚返善雄で、辞書として指定されたのは『井上ポケット支那語辞典』であった。井上翠は私の母校姫路中学<sup>1)</sup>の大先輩であった。『姫路中学校同窓会名簿』を繙いているうちに、第五回卒業生に井上がいることに気付いた。

後述する如く、実は井上は姫路中学を4年で中退していたのである。然し、いつからか彼の名前が同窓会名簿に載せられるようになったらしい。彼の同期生は1894年3月に卒業しており、同期には春山作樹（のちに東大文学部教授）がいた。後に彼は何度か井上に救いの手を差しのべている。1年先輩には辻善之助<sup>2)</sup>（東大文学部教授、国史学）がおり、1年後輩には永田秀次郎（東京市長、拓務大臣、俳号青嵐）もいた。

本稿では、井上翠が中国とどのような関わりを持ったかを考察したい。但し、彼に関する資料は殆どない。唯一残されているのが、自伝『松涛自述』<sup>3)</sup>（大阪外語大中国研究会、1950）である。私は本書の所在を確かめることができなかつたため、大阪外大名誉教授伊地智善繼氏より秘蔵の書を拜借した。処が、東京外大の中嶋幹起氏も私が本書を捜していることを聞いて、わざわざ本書のコピーを作つて下さった。本稿では、多くの部分を本書に依拠せざるを得なかつた。



## 1. 井上の生い立ち

井上は1875年3月10日、姫路藩の書家井上松香の次男として生まれた。同79年、5歳の時に実母を喪った。1886年、城東小学校中等科を卒業して、県立姫路中学に入学した。当時、姫路中学は兵庫県の唯一の県立中学であったから、彼は極めて優秀な少年だったにちがいない。処が、1892年、父松香が死亡したため、彼は中学を4年で退学するしかなかった。途中で学業を放棄することは、彼にとってどれだけ無念であったかわからない。

生計の手段として、彼は小学教師の途を選んだ。勿論、資格がないから初めは準教員であったが、1895年には訓導の資格をとった。1898年向学の志抑えがたく、上京してまず赤坂区中之町小学校に奉職した。その間、幼少の頃から学んだ書道を生かして、中等学校習字科の教員免許状を取った。翌年には国語漢文科の免許状をも取得した。その結果、各地の中学校、女学校から招請があったが、もう少し勉強を続けたいとの念が強く、地方への赴任をためらった。この間、彼は英語を学ぶため国民英語会に入り、比較文法を研究したいと思いたって、更にドイツ語も学ぶべく、独逸協会学校へ入学した。

他方、各地の中学校からの招請も続いた。井上にとって亡父の借債の件が、かねてから気になっていた。そこで、郷里姫路に近い竜野中学の招きに応じて、1901年教諭兼舍監<sup>4)</sup>として赴任した。竜野在勤は僅か1ヵ年であったが、数ヵ月で亡父の借金を返却し、墓碑まで建てることができた。そこで、翌年再度上京して、当時全国でも模範的な学校として重んぜられていた府立第一中学に奉職した。同校の国語科主任は福井久蔵であった。井上は国語を担当したが、生徒の中には谷崎潤一郎や辰野隆がいたと言う。府立一中に奉職すると同時に、外国语学校清語科別科（夜間）に入学し、今後中国語を学び中国語で世に立つ決意を固めた。比較文法の研究は到底不可能であると気付いたからである。当時「清国は団匪事変の打撃により国勢委靡して振わず、これを挽回するために、变法自強の策を樹てる必要を痛感し、その範を日本に取ろうとして、国勢の恢復を計っていました。北清事変に出兵した日本軍の行動が北支に好印

象を与えたことも手伝いまして、日支親善の気運が段々高潮してきました」<sup>5)</sup>。彼が府立一中に奉職して間もなく、日本の教育事情を視察するため来日した呉汝綸<sup>6)</sup>が同校を訪れ、校長勝浦鞆雄と教育上の意見を交換したこともあった。かかる状況が、井上の中国に対する傾斜を一そう強めていったのであろう。

これに加えて、亡父の妹の娘2人が長崎の唐通事だった家に嫁いでいたという事情もあった。即ち、彼の従姉たちはそれぞれ吉島俊明<sup>7)</sup>、中山繁松<sup>8)</sup>と結婚していた。井上がまだ姫路にいた頃、彼らは時々父松香を訪ねて、中国の事を話題にし、松香も又彼地に赴いて、中国の書家と意見を交換したいと語っているのを傍で聞いて、井上自身の心中にも中国への関心が潜在していた。これらの事情が重なって、彼の中国語への専念が生まれてきたのであろうが、更に言えば、英語やドイツ語では正規の教育を受けた者に到底かなわないが、中国語ならば第一人者になることも可能である、と考えたのではなかろうか。

井上が外国语学校別科に入学したのは、1902年9月、28歳の時であった。学校は神田一橋の東京高商（現在一橋大学）の構内にあり、高商の教室を借りて授業をしていた。夜間の別科は一日2時間の授業で、土曜は休みであった。一緒に別科へ入学した者は100余名だったが、2年に進級したのは15～6名で、修了したのは僅かに6～7名だったと言う。彼が別科を修了したのは、1904年、満30歳の時であった。外語で得た所は余り多くなかったが、教授の松雲程<sup>9)</sup>には個人的に色々教えられた。日曜ごとに松家に集まって、『官話指南』『読日清語入門』『西廂記』『児女英雄伝』等を読んでもらった。この勉強会に集まったのは本科生で、別科は井上一人だけであった。松は「金銭には極めて清廉潔白な人で、月謝などは絶対取ら」なかった<sup>10)</sup>。外語在学中に「松雲程先生の家庭で教授を受け、一方では留学生の世話をやりましたので、大いに進境を見ました」<sup>11)</sup>と語っている。然し、本当に中国語を修得するためには、どうしても中国へ渡って勉強せねばならぬと考えた。

そこで、1905年中国語に専念するために、府立一中を退職したが、生計の一助にと『日華語学辞林』を編纂した。これは井上にとって、最初の辞書づくりであった。この辞林は友人坪谷水哉の仲介によって、博文館から出版することができた。当時、東京高師校長嘉納治五郎は文部省

の要請を受けて、中国留学生の教育のために弘文学院<sup>12)</sup>を創設し、その院長を兼ねていた。井上は弘文学院の日本語教員となるべく、友人を介して申し入れた処、直ちに嘉納の承諾を得ることができて、1906年、弘文学院の教師となった。彼は日本語を教える際に、難解な点は中国語で説明したので、留学生には大いに喜ばれたと言う。

当時、中国から来日した留学生の中には、夫婦で来日した者や、少數ながら女子学生も混じっていたので、鍋島侯爵夫人や小笠原伯爵夫人等の提唱で、1903年〈東洋婦人会〉が結成され、夫人同士で日中友好親善をはかるようになった。この頃、清国では多数の日本人教習を招いていたが、女子教育に従事する女性教師も求められていた<sup>13)</sup>。〈東洋婦人会〉では、婦人教師を志す者を促成教育するため〈東洋婦人会清国派遣女教員養成所〉を設立した。入学資格は高等女学校卒業程度で、1ヵ年間中国語やその他必要事項を教授した。設立と同時に、松雲程と井上は、招かれて中国語を担当した。第1回の入学者は10余名であったが、彼女らは「前途に横たわる重責を自覚していましたから、語学の進歩もすさまじいもので、僅々1ヵ年で相当な成績を顕わしました」<sup>14)</sup>。井上は翌1907年に北京へ赴任したから、この養成所との関わりは僅か1年であったが、彼は熱心に授業したらしい。

第1回修業生の1人<sup>15)</sup>は、当時湖廣總督であった張之洞の処へ赴き、他の1人は山東巡撫の孫寶琦の処へ赴き、それぞれ家庭教師の役割を果した。「家庭教師と申しても、支那の大家では、その子弟を公立学校に送らず、各自の家に塾を設け、家庭教師を聘して教育させるもので、中には同族が協同して一学校を建設した大仕掛けのものもあり、そして昔から一般社会が教師を尊敬する風習がありますから、東洋婦人会から派遣された女教師も、相当の優遇を受けたのであります」<sup>16)</sup>。

## 2. 京師法政学堂と井上<sup>16')</sup>

井上はかねて中国へ渡って、実地に中国語を学習したいと強く望んでいた。弘文学院では中国留学生に日本語を教え、養成所では婦人たちに中国語を教えていたので、語学研究にはすこぶる恵まれた環境であった。然し、井上はそれでは満足できなかった。彼はどうしても実地に中国語

をマスターしたかった。そのためには中国へ渡って勉強しなければならなかった。彼には「留学」することは到底不可能であったから、彼地に職をもとめたいと考えた。そこで、亡父の門下で姫路藩出身の陸軍次官石本新六（後に陸軍大臣、男爵）に依頼したが相手にされなかった。府立一中の同僚であった小木植が、京師法政学堂正教習巖谷孫蔵<sup>17)</sup>の弟朴助と懇意であった処から、小木を介して巖谷に働きかけた。又、同じく同僚谷口豊五郎も、巖谷と同藩の出身であり、その上巖谷は谷口の父の門下生であった処から、谷口からも巖谷へ依頼してもらったが、いずれも反応はなかった。更に、小木の友人中島半次郎<sup>18)</sup>を介して、その友人巖智怡<sup>19)</sup>（当時東京高工、後の東京工大に留学中）に、父の巖修<sup>20)</sup>（学部侍郎）に依頼してもらった。

丁度その時、京師法政学堂では日本語教師を求めており、その人選を直接東京の清国公使館へ照会してきていた。そこで巖智怡は井上を公使館に推薦したが、公使館側でも井上が弘文学院教師として中国留学生の面倒をよく見ていることを知っていたので、彼の採用に賛成であった。1907年9月19日、彼は神戸から乗船して、26日には北京に到着した。29日は学部左丞・法政学堂監督喬樹枏主催の歓迎宴が開かれ、翌30日、教習としての雇傭契約に調印した。

11月になって、法政学堂総教習の巖谷の主催による井上の歓迎宴が開かれ、法政学堂の日本人教習全員出席した。その席上、巖谷は次の如く語った。「我々法政学堂日本教習は、君の任命に対して強硬に反対した。従来、学堂にて教習を採用する場合は、監督より私に依嘱した。而るに今回君の任命に関しては、監督より一言の相談も受けなかった。そして君が突然赴任したので、我々は君に反対の態度を取っていた。今は、君の人柄も分かったし、学部も今後日本教授を採用する場合には、従前どおり必ず私の手を経ることになったので、今晚は従来の行きがかりを発表する」<sup>21)</sup>。

井上自身も日本人教習たちが自分に冷淡な態度をとることに気付いていたが、上述のような巖谷の談話で、漸くその事情を了解した。然し、井上は「巖谷博士の手を待っていたならば、私の如き学歴のない者は、百年河清を待つのと同じ結果であったわけです。それがこの時に限り学部から直接公使館へ委嘱したことと、[私が] 留学生間に信望のあった

ことが買われて、私が登場し、多年渴望の清国留学の念願が叶うたわけであります」<sup>22)</sup>と追想している。いずれにしろ、井上にとっては長年の願望が実現したわけで、彼の喜びはどれだけ大きなものであったかわからない。

同年12月、法政学堂ではもう一人日本語教授を採用することになり、巖谷の下で人選の会合が開かれ、多くの候補者が挙げられたが、結局井上の推薦した松本龜次郎<sup>23)</sup>に決定した。松本は1912年、雇傭契約が満期となって帰国した後も、中国留学生の教育にその生涯を捧げたことはよく知られている。

さて、井上が奉職した京師法政学堂は、最初は京師大学堂仕学館であった。その他に、師範館<sup>24)</sup>も設けられていた。清国政府の要請に応じて、外務省は仕学館正教習に京大教授・法学博士巖谷孫蔵を推薦し、師範館正教習には東大教授・文学博士服部宇之吉<sup>25)</sup>を推薦した。1903年、彼らは北京に着任して、自ら入学試験の施行にも当った。最初の学生は、現任官吏の中から試験で70名を選抜し、後に聽講制度を設けて、聽講生30名をこれに加えた。学生に対して、日本の帝国大学の法科に等しい講義を行ない、主として日本人教習がこれにあたった。翌1904年湖廣總督張之洞が入京して、学堂章程改革の意見を述べ、新しく進士館を設置することになり、進士合格者をここに入れて3年間再教育することになった。この結果、仕学館は京師大学堂より分離して、進士館に付属することになり、巖谷らも進士館へ転任した。だが、その翌年には科挙制度が廃止され、進士館も存在意義を喪失したので、これに代って京師法政学堂が成立した次第である。

法政学堂の制度・組織について、巖谷の意見を徵した上、清国当局は、本科・予科に分け、予科では主として日本語を教え、本科では日本人教習が主要教科を教える方針を確定した。1907年、正式に京師法政学堂が発足した。予科で日本語を教えることになったので、先ず小林吉人（文學士、後に新潟中学校長）が招かれ、続いて井上が就任した。更に松本龜次郎が採用されたのは、前述したとおりであった。

法政学堂には、本科・予科の他に、別科・講習科もあった。予科は中学卒業生を試験の上で入学させ、主として日本語と普通学を教授した。本科は予科修了者を入れ、政治・法律の二門に分けて教授した。別科は

速成科の如きもので、当面の必要に応ずるため、現任の官吏や挙貢監生<sup>26)</sup>を試験して、合格した者を入学させた。修業年限は3年。講習科は吏部の新任職員などに法政の大要を速成教授したもので、修業年限は1年半であった。

井上は法政学堂から月俸200元、兼務した法律学堂から100元、併せて300元を支給された。彼は以前杉栄三郎が借りていた石駒馬胡同の家屋を借りたが、それは「正房三間、東西耳房一間、東西廂房各四間、西院正房兩間、合計拾柒間」<sup>27)</sup>という立派な家であった。但し、家賃は月27元であった。

法政学堂における日本語の授業がどのように行なわれたのか、具体的なことは全くわからないが、井上にとってこの授業は、中国語研究に大きなメリットがあつたらしい。彼は当時のことを次のように語っている。「弘文学院で留学生に日本語を教えるに当たって、必要上日華辞典の編纂を思い立ち、言海<sup>28)</sup>を参考本として仕事に取り掛っている最中、召聘を受けたので、その稿本を携えて北京へ行きましたが、『百聞不如一見』で、内地で苦心惨憺の末やっと訳出した言葉も、事実に当面すると簡単に解決がつき、清国には此の物はないと思って数十言を費やして説明を附した言葉も、眼前に實物を發見しては、啞然としたこともあります。何でも宝の山に入り手を空しくしてはならぬと、歓喜に満ちた努力は着々と拂っていました」<sup>29)</sup>。

井上が渡清を強く欲したのも、中国語學習を現地でやりたいと熱望したからであった。それ故、北京在勤中、彼は寸暇を惜しんで中国語學習に取り組んだ。當時、日本人教習の中で「長春亭に遊ばぬものは、商法の某博士と井上だ」<sup>30)</sup>という噂を立てられたほど、彼は中国語に熱中していた。井上としては、やっと中国へ来られたわけだから、本務の日本語教授の他は、すべてを中国語學習に集中したのであった。『日華辭典』の編纂は、彼の当面の課題であったから、その完成を急いだ。總教習巖谷は彼の努力を認めて、原稿が全部できあがった時には、初めから終わりまで眼を通し、彼の努力ぶりを評価してくれたという。

1911年12月、井上は契約期間が満了して帰国した。彼にとって4年間の北京滞在は必ずしも充分な期間とは言えなかつたが、任期も終了し、辛亥革命も發生したこととて、帰国したわけである。

### 3. 井上と中国語辞典

井上が中国留学生を教える必要上、最も必要を痛感していたのは『日漢辞典』であった。北京在任中も、多くの時間をそのために割いた。苦心して集めた俗語を、以前に編集した『日華語学辞林』に片端から書き込んだが、それでも3巻あったと言う。中国語文法についても、研究に取りかかった。まず「大体の骨組を編んで、宗蔭氏と二人で用例を書きあげ、それがノートに4、5冊ありました。これは〔大阪〕外語時代の虎の巻で、一部分は『ポケット支那語辞典』<sup>31)</sup>に入れてあります。……学校が法政学堂であった関係上、法制経済に関する語も相当入れました」<sup>32)</sup>と言う。

さて、日本へ帰ってきた井上にとって、何よりも緊急なことは、生活の資を得るためにポストを捜すことであった。嘗ての上司巖谷は井上の就職を心配し、服部にも依頼しておいたと云う。1912年正月ごろ、市電の中である友人に邂逅した処、「服部さんが君に面会したいといわれていたから、早くゆきたまえ」と告げられた。早速、服部邸を訪ねると、4月から東京外語に〔専任〕講師として勤務できるよう、校長村上に話してあるから、すぐ村上を訪問せよ、と言って紹介の名刺を渡された。そこで校長を訪ねた処、やはり4月から講師として採用すると伝えられたので、すっかり安心していた<sup>33)</sup>。処が、4月になっても外国语学校から何の音沙汰もなく、ひそかに不安を感じていた処、15日ごろ校長から呼び出しの葉書が届いた。早速、出向いてみると、学校の都合で採用は中止になったから、マレーシアの留学生にでも日本語を教えてくれ、と言われた。早速、服部を訪問して、事情を開陳した処、服部も意外の事に驚愕し、「それは某教授の反対によってであろう。そんな事があるかも知れないと予想して、最近特別にその教授に君のことを依頼しておいたが、大変結構ですと云うことであった。ひどい事をする、と立腹」したが、後の祭りであった。止むなく、村上の紹介で阪谷芳郎<sup>34)</sup>に中国語を教授することになり、週1回小石川の阪谷邸でむいて、『急就篇』を教授した。ほどなく、阪谷が東京市長に就任したので、井上は又仕事がなくなり、やむなく広島中学へ赴任した。折角、北京で蓄積した中国

語の成果も生かせないまま、中学へ赴任しなければならなかつたことは、彼にとって実に無念なことであった。彼自ら広島の3年間を「受難時代」<sup>35)</sup>と呼んでいる。ただ幾分彼の心を慰めたのは、偕行社で中国語教授を担当したことと、姫路中学以来の友人春山作樹<sup>36)</sup>が広島高師教授をしており、彼の同僚岡部為吉（心理学）と井上宅で中国語の学習を始めたことであった。春山、岡部の兩人は、中国哲学を研究するためには、「白話」の学習から始めねばならぬと云うのが信念であった。井上は斯くて、広島中学で国漢を担当し、偕行社や春山らに中国語を教えながら、北京でまとめあげた『日華辞典』の副本清書に励んだ。

その頃、山口高商に「支那貿易研究科」という専科が新設されることになり、井上は杉栄三郎<sup>37)</sup>及び山崎達之輔<sup>38)</sup>（当時、文部次官）の推薦で、山口高商へ赴任した。井上が出席した最初の教授会で、校長横地石太郎は、井上の『日華辞典』のことを紹介し、その出版についても配慮してくれた。結局、同僚稻葉岩吉（君山）<sup>39)</sup>の斡旋で、東京本郷の文求堂<sup>40)</sup>田中慶太郎が引きうけてくれることになった。これ以後、井上の辞典はすべて文求堂から出版されるようになった。田中が井上の仕事を深く信頼した結果であろう。

『日華辞典』は、1920年から築地活版所で印刷にとりかかったが、組み方が非常に面倒なため、時間がかかっている中に1923年9月1日関東大震災にあい、紙型はすっかり焼失し、原稿の一部まで焼失、辞典出版は頓挫してしまった。普通なら意氣消沈する処であるが、井上は反ってこれを「一大転機」とした。実は彼の原稿は清末に完成したものであるが、時代は既に中華民国になっており、制度や言語も大いに変化していた。井上はこの機会に旧稿に大々的な改訂を加え、新語彙をふやし、訳語を改善し、語例を大幅に追加した。この結果、面目を一新し、新時代の要求に即応できるようになった。この改訂増補が完了したのは、1929年のことであった。引き続き副本を作成し、実際に『日華辞典』が出版されたのは、1931年5月のことであった。彼が本書の編纂を開始してから、実に26年を経過し、彼自身も57歳に達していた。彼の喜びがどんなに大きかったかは、想像に難くない。

山口時代は、井上にとって誠に恵まれた時代であった。校長も彼の辞典編纂に理解を示し、十分な余暇を与えてくれたので、広島時代に着手

していた華語大辞典の編纂は、順調に進捗した。それ故、山口時代の終わりには、華語大辞典の原稿はほぼ完成していた。この成果は、ひとえに校長横地の理解ある援助に負う所が大きかったとして、「今尚お感謝措く能わざるものあり」<sup>41)</sup>と自伝中で回想している。

1922年正月、広島高師教授北村沢吉（佳逸、漢文）より君を大阪外語校長中日覚に推薦しておいたとの手紙が届いた。それと前後して、広島高師教授塚原政次（後に広島文理大学長、姫路中学第1回卒業）、東大教授春山からも、それぞれ彼を大阪外語へ推薦したとの手紙が来た。かねて山口の気候風土があわず、家族の者が次々と病気にかかったこともあって、井上には朗報であった。その上、専門の学生を教えると云うことは、彼にとって大きな喜びであった。斯くて、22年春、井上は新設された大阪外国语学校へ転任した。

当時、学生が専門に中国語を学習するのには、参考にすべき適當な辞典がなく、教室で習ったことを忘れたら最後、自分で調べるわけにもいかず、大いに不便を感じていた。そこで井上はジャイルズ<sup>42)</sup>の辞典2部を購入し、1部は学生の利用に充て、1部は井上自身が利用した。然し、それでは事たりないので、是非中国語辞典を早く作らねばならぬと痛感した。そこで、文求堂店主田中と謀って、速かに中国語辞典を作ることになった。前述した華語大辞典の原稿の中から、主として卑近な口语および文語（現代語のみ）を抽出し、学生の学習に役立つような小辞典を編纂した。それが1927年に刊行された『支那語辞典』である。更に1935年には、これを圧縮して『ポケット支那語辞典』を出版した。斯くて、井上は授業の他は、もっぱら辞典の編纂に従事したわけである。

1936年春、井上は大阪外語を退職して、再び古巣の山口高商へ講師として戻った。翌37年、日中戦争が始まった年に、『日華辞典』を圧縮して、『ポケット日華辞典』を刊行した。1939年、大阪外語支那語科の卒業生たちは、恩師井上のために寄金を集めて、郷里姫路に邸宅（姫路総社の近傍<sup>43)</sup>）を新築して彼に贈呈した。同年2月、彼は久しぶりに姫路へ帰省した。既に老境に入った井上にとって、華語大辞典の刊行は、最後の目標であった。原稿をいつも座右に置いて、気がついた箇所に手を加えていた。然し、大辞典の出版はなかなか目処が立たなかった。日中戦争が拡大するにつれて、中国語辞典に対する需要も増加した。学生のため

に作った『支那語辞典』では充分ではなかったので、1941年には『支那語中辞典』を刊行していた。

1942年春、彼は山口高商講師を辞して、姫路へ戻ってきた。そこには大阪外語の卒業生から贈られた立派な邸宅と書斎が待っていた。普通ならば、悠々と余生を送れるはずであったが、太平洋戦争の開始によって、戦火は徐々に日本本土に近づいた。戦争末期になって空襲の心配を恐れた井上は、17巻6000枚にのぼる大辞典の原稿を守るために、それを亜鉛箱に入れ、鉄板で被い、庭の一隅の竹藪の中に埋めて、ひたすらその安全を祈った。だが、1945年7月3日深夜の大空襲で姫路の中心部は完全に灰燼に帰し、井上の邸宅も戦火を免れることはできなかった。彼は辛うじて郊外へ避難することができた。翌日、自宅に帰ってみると、邸はすっかり焼けおち、彼が長年苦心して集めた万巻の漢籍、中国語書籍より辞典資料に至るまで、すべて烏有に帰していた。幸いなことに、彼が庭隅に埋めておいた大辞典の原稿だけは戦火を免れていた。そこで、再びこれを地中に埋め直して、城北3里余の農村の友人宅に疎開した。「旬日を経て之を発掘せるに、亜鉛箱は雨水の侵入を受け、原稿は水浸しとなり、一部分は文字消滅し、一部分は模糊となり、赤字を以て校訂せる部分の如きは殆ど消失せたり」<sup>44)</sup>という惨状であった。

これは井上にとって、二度目の災難であった。最初は関東大震災の際、『日華辞典』の紙型や原稿を焼き、今回は大辞典の原稿が水浸しになってしまった。然し、井上は「自ら不幸中の幸いを慰めつつ、日々屋外広庭にて之を乾燥し、破損せる箇所を繕い、湮滅せる文字を修理すること数月に亘」<sup>45)</sup>った。1914年、井上が筆を下してから、30余年を経た大辞典の原稿は、斯くして漸く原型に戻った。この大辞典が「今後果して世に出づるは、果して何れの日にあるべきか。多年数奇の運命に翻弄されたる此の辞典は、徹頭徹尾予の独自の執筆に係り、其の責任の重大を認識せんばあらざるなり。若夫れ完全無欠なる華語大辞典の出現は、他日之を有能達識の学者に待つべきものにして、本書の如きは単に陳呉の役<sup>46)</sup>に当たれるものに過ぎず」<sup>47)</sup>と、大辞典の序言に記しているが、井上にとって本書の出版は、終生の念願であったはずである。然し、井上の念願は遂に実現できなかった。現在、この原稿は大阪外大名誉教授伊地智善繼氏の手許に保管されている。然し、この辞典が現在まで陽の目

を見ることは無念至極である。

井上は戦災にあった後、一時城北の農村に仮住居していたが、1年後の1946年7月には岐阜へ移住した。更に、48年には京都市東山区日吉町に住宅を購入し、同時に大阪外語<sup>48)</sup>講師に就任した。既に、74歳に達していた井上には、週に1～2回にしろ、京都から大阪へ通勤することは容易な事ではなかったであろう。

### おわりに

井上と中国との関わりは、初期においては弘文学院で中国留学生に日本語を教え、又東洋婦人会教員養成所で渡済して教育事業に従事する女性に中国語を教えたことであった。然し、彼は中国留学生の教育に生涯を捧げる気にはならなかった。父の死亡により、姫路中学を4年で中退した彼には、大きな挫折感があった。向学心の強かった井上は、何か専門的な研究を志し、初め比較文法をやりたいと考えたが、基礎的な研究を欠くことに気付いて、新たに中国語の研究を目指すことにした。そのため、外国语学校別科に入学して、熱心に中国語を学習した。然し、本格的に中国語を研究するには、どうしても中国へ渡って、現地で勉強するに如くはないと決断した。苦心の末、京師法政学堂の日本語教習として北京へ赴いた。4年間の北京在任中、中国学生に熱心に日本語を教える一方、余暇はすべて中国語の研究に充てた。彼の北京における努力は、上司の巖谷孫蔵にも認められ、その他にも多くの知己を得た。服部宇之吉にも、その勉強ぶりは評価された。

帰国後、彼は適当なポストが見つからず、折角の中国語の蓄積も生かせなかつたが、やがて山口高商にポストを得、更に新設の大坂外語へ移って、支那語科の学生たちに中国語を教えた。これは彼の職務であったが、それと同時に中国語辞典、日華辞典の編纂に全力を注いだ。中国語の教師として、彼は辞典を作ることに大きな使命感を抱いていた。彼は中国語を学ぼうとする日本の学生のために、すぐれた工具書を提供したのである。これは日本人の中国理解を進める上に大いに役立った。

彼が最初に作った中国語の辞典は、1905年の『日華語学辞林』(博文館)であったが、1927年学生のために編纂した『支那語辞典』以来、すべて

文求堂から出版された。彼が苦労をかさねた『日華辞典』は1931年、『ポケット支那語辞典』は1935年、『ポケット日華辞典』は1937年にそれぞれ出版された。1941年には『支那語中辞典』も刊行された。更に、日本人の間に中国語学習熱が高まってきたので『井上ポケット支那語辞典』(1943)、『井上ポケット日華辞典』(1944)をも刊行した。戦時中、中国語を学んだ人々の多くは、井上の中国語辞典の恩恵を受けている。それだけ信頼された辞典だったのである。

日本の敗戦後、急速に高まった中国熱に呼応するため、大阪外語の井上の弟子であった吉野美弥雄、金子二郎、小林武三、住田照夫、伊地智善継、芝池靖夫、辻本晴彦の諸氏は、相寄って『井上中国語辞典』を、江南書院より1954年4月に刊行した。その序言には「井上中国語辞典は、既に幾度か版を新たにし、表を改めた。常に新らしく常に有用であるようとの意にほかならない。この新辞典では、旧版中辞典の語彙を整理するとともに、最近の新語を補充し、記述の体裁を改め、注音を整え、現下適用の中国語新辞典として、面目の一新を計ったものである」と述べている。これが井上の名を冠した最後の中国語辞典であったが、今やその存在も忘れられていることは甚だ残念である。なお、井上は1957年6月9日、82歳でその生涯を終った。(1992・12・1)

### 注

- 1) 姫路中学は戦後の学制改革で、姫路西高となったので、同窓会も現在では〈白城会〉と称している。同窓会名簿も『白城会名簿』という。
- 2) 辻善之助(1877～1955)は姫路市の出身、東大国史学科を卒業の後、東大助教授、教授となり初代史料編纂所長にも任せられた。『日本佛教史の研究』をはじめ、多くの著書がある。その息達も父の業を嗣いで、江戸時代史を専攻している。
- 3) 『松濤自述』は井上が口述したものを、筆記して、更に井上が手を入れ、出版したものである。1950年というすべてが不足していた折とて、紙も卒業生が配慮し、印刷も大阪外大の印刷所で刷ったという、涙ぐましい産物である。
- 4) 当時、各地の県立中学には遠隔の地から入学する者もあったので、必ず寄宿舎が設けられ、若い教諭が舍監を兼ねていた。筆者が1934年姫路中学へ入学した頃もそうであった。
- 5) 『松濤自述』3丁裏。

- 6) 呉汝綸（1840～1903）は清末の官僚、学者。張之洞の幕僚となり、李鴻章にも用いられた。1902年、清朝の新政実施に当り、京師大学堂総教習に任命され、学制視察のため来日した。その著に『東游叢録』がある。
- 7) 吉島家はもと長崎唐通事であったが、俊明は神戸へ出て裁判所の通訳となり、日清戦争の際には通訳官として従軍した。戦後は台湾国語学校の教員となった。著書に『日台小辞典』『日支商業用尺牘』がある。
- 8) 中山家も長崎の唐大通事の家柄であった。祖先は馬栄宇といい、福建省長樂県の出身、明末の戦乱を避けて長崎へ亡命、日本へ帰化した。繁松は外国语学校へ入り、卒業後は兵庫県に奉職、通訳官となったが、後に三軒屋紡績会社（東洋紡の前身）に転じた。何如璋『使東述略』の中に、彼のことが出ている。汪向栄『日本教習』（三聯書店、1988）320頁。
- 9) 松雲程は外国语学校教授として清国から招かれたが、日本語は全くできなかった。然し、学生には非常に親切で、自宅で学生を集めて勉強会をしても、月謝など絶対に取らなかった。井上の外語時代に最も教えられる処多かったのは彼であった。
- 10) 『松濤自述』7丁表。
- 11) 前掲書、9丁裏。
- 12) 弘文書院は屢々「宏文」書院と記されているが、これは乾隆帝の名前「弘曆」を避けたわけであるから、我々は弘文書院と書くべきである。嘉納治五郎が初め「亦樂書院」と名づけたものを、1902年に改称した。実藤惠秀『中国人日本留学史』（黒潮出版、1970）参照。
- 13) 汪向栄『日本教習』（三聯書店、1988）には、清末に各地の女学堂へ教習として赴任した多くの女性たちの姓名が挙げられている。本書は竹内実の監訳で、朝日新聞社より『清國お雇い日本人』（1991）と題して刊行された。但し、この書名では「教師」ということが欠落している。
- 14) 『松濤自述』10丁表。
- 15) 彼女は後に、東京外国语学校出身で、三菱に入った秋山昱禱と結婚した。中国が取りもった縁であろう。
- 16) 『松濤自述』10丁裏。
- 16) 二見剛史「京師法政学堂と井上翠」（『鹿児島女子大学研究紀要』9—1、1988）がある。
- 17) 嶽谷孫蔵は京都帝国大学法科大学の教授で、法学博士であったが、外務省の推薦で仕学館正教習として北京へ赴任した。副教習として同行したのは、杉栄三郎（法学博士、後に帝室博物館々長）であった。
- 18) 中島半次郎は、当時北洋師範学堂（天津）の総教習で、心理学、倫理学を担当していた。後に早稲田大学第一高等学院校長となった。汪向栄が中島を元早大高等部科長としているのは誤りである。

- 19) 嶽智怡は東京高等工業学校を卒業後、帰国して中華書局經理となり、更に天津造謗公司を經營、1917年には直隸省實業府長に就任した。
- 20) 天津の人、若冠進士に合格し、翰林院に入る。義和團の際、袁世凱に認められ、1907年、学部侍郎。袁の失脚後は天津に帰る。1914年、熊希齡内閣の教育総長となる。南開学校の設立に尽力。
- 21) 『松濤自述』11丁表、裏。
- 22) 同上、11丁裏。
- 23) 松本亀次郎も弘文学院の教師で井上と熟知であった。帰国後は中国留学生の教育事業に半生を捧げた。楊正光・平野日出雄『松本亀次郎伝』（北京、時事出版社、1985）、汪向栄「中国的近代化和松本亀次郎」（汪向栄『日本教習』収録）、松本亀次郎『中華留学生教育小史』（東亞書房、1931）。
- 24) 師範館は教員養成を目的とする学堂であったが、仕学館の京師大学堂よりの分離と共に、師範館も分離し、優級師範学堂に改編された。わが国の高等師範に相当する。
- 25) 服部宇之吉（1867～1939）については、山根幸夫「服部宇之吉と中国」（『社会科学討究』99、1988）参照。
- 26) 举貢監生とは、举人・貢生・監生の意。
- 27) 『松濤自述』15丁表。
- 28) 『言海』は大槻文彦が編纂した国語辞書。文部省の命を受け、1875年に起稿、91年に刊行された。後に『大言海』が編纂された。
- 29) 『松濤自述』17丁裏。
- 30) 同上、18丁表。
- 31) 『ポケット支那語辞典』は後述の如く、1935年文求堂より刊行された。
- 32) 『松濤自述』18丁表。
- 33) 同上、18丁裏。
- 34) 阪谷芳郎（1863～1941）は、岡山県の人。東大法科卒業後、太蔵省に入り、大蔵次官に昇る。1906年西園寺内閣の藏相。辛亥革命後、日華合弁の銀行創設の議があり、阪谷はその総裁に擬せられたので、中国語を習うことになった。男爵。
- 35) 『松濤自述』19丁裏。
- 36) 春山作樹（1876～1935）は、姫路藩の出身。東大文科大学哲学科を出て、教育学を修む。広島高師教授を経て、東大教授になる。主として日本教育史の研究に当たった。
- 37) 杉栄三郎（1873～1965）は岡山県の出身。東大法科卒業後、太蔵省に奉職。北京の京師大学堂教習より帰国後、宮内庁に入り、図書頭兼諸陵頭、帝室博物館館長となる。法学博士。
- 38) 山崎達之輔（1880～1948）は福岡県の出身。東大法科を出て初め台湾総

督府に入り、文部省に転じ次官となる。1924年代議士となり、立憲政友会に属した。

- 39) 稲葉岩吉（1876～1940）は新潟県の人。外国語学校支那語科卒。日露戦争の際に通訳として従軍。後に満鉄歴史地理調査部に入り、歴史家となる。山口高商教授を経て、朝鮮史編修官となり、更に建国大学教授に転じた。
- 40) 文求堂は東京本郷三丁目にあった中国書肆。店主田中慶太郎は書店主というのみでなく、深い学識を有した文化人であった。中国関係の図書の出版にも従事した。彼の編した『支那文を読む為の漢字典』がある。
- 41) 『松濤自述』26丁表。
- 42) ジャイルズ H. A. Giles. (1845～1933) は英国の中国学者。初め中国各地の領事をつとめ、後にケンブリッジ大教授となる。彼の編した *A Chinese English Dictionary* は、典型的な中国語辞典として、重宝され、版をかさねた。日本の中国語学習者にも愛用された時期があった。
- 43) 姫路総社（射盾兵主神社）の周辺にあったことは、伊地智教授から教示された。
- 44) 『松濤自述』26丁裏。
- 45) 同上、26丁裏。
- 46) 陳呉の役とは、秦末に発生した陳勝・呉広の乱のことを指すが、転じて先駆けをなす者の意。
- 47) 『松濤自述』26丁裏。
- 48) 大阪外国语学校は、戦時中「大阪外事専門学校」と改称され、1948年当時はまだこの校名を称していた筈である。翌49年より大阪外国语大学となつた。

最後に、『松濤自述』を貸与して下さった大阪外国语大名誉教授伊地智善繼先生に衷心より感謝申し上げる。又、自ら秘蔵しておられた本書のコピー本を作成して、筆者に恵与された東京外大中嶋幹起学兄にも感謝する。